

しつけと幼児教育



山下 俊郎

〈一〉

「しつけ」ということばは教育の一つの方法を意味することばである。

しつけはもともと裁縫の用語である。すなわち、しつけは「仕付」であるといわれている。それは、一定の折目をつけるためにあら糸で縫いつけておいて、そこにしっかりとした折目がつくようにすることを意味している。そして、古い用法では、礼儀作法をしつけることが、しつけといわれていたということである。

この場合、その中心になる意味はやはり方法的な意味であ

る。すなわち、教育の一つの方法として、「仕付」けることが意味されているのである。すなわち、この方法は、右に述べた意味のとおり、理を説いて聞かせ、飲み込ませ、理解させて、ある一定の教育内容を与えていくという方法ではない。そういう行き方とちがって、身に行なって習熟させる、すなわち、行動することによって次第になれさせてゆくという方法である。ここでは、教育者が、望ましいと思う行動の様式を、そのまま端的に教育される者の上に、いわば移植するという方法が行なわれ、これが「仕付」であるといえる。着物の「仕付」のように、一定の型の中へと自然に導入し、

その中に入ることによって、望ましい行動の様式が自然に身につくようにしてゆくことがすなわちしつけなのである。この場合、しつけはこれを受ける者の側からいえば、積極的に学習する意志はない、したがって、一定の行動様式に自然になれることによって、それが自然に身についていくというのが、いわゆる学習と異なるところのしつけの特質であると考えられていたのである。

△二▽

いまわたくしが右に述べてきたことは、しつけのいわば伝統的な用法における意味の説明である。今日、わたくし達は、このような意味、ことに礼儀作法のしつけというようにせまい意味において、このことばを使おうとは思わない。

第二次大戦の終戦後数年、いわゆる新しい教育ということががやかましく言われた当時、一部の人は、しつけとすることは、子どもの自発性を無視した「押しつけ」であり、封建的な教育方法であるといつて、しつけを排撃し、否定した。しかし、このような否定論者は、きわめて形式的な上すべりの論をする人達である。しつけは押しつけだという論は、教育方法としてのしつけを単に形式的にとらえているに過ぎない。

い。そこに関連している方法的意味、ことにその心理的な構造の意味を理解できない形式論者であるとわたくしは考える。

わたくしは、ひろくいうならばしつけは生活指導の方法であり、その技術であると考える。もちろん、この場合、礼儀作法というような狭い、そしてとられた考え方はとらない。むしろ、ひろい意味において、望ましい生活の様式を子ども達に与えるために、望ましい生活の様式へと子ども達を誘導していくための一つの教育技術であると考えるのである。

そして、このような意味にしつけを考えると、幼児教育においてこそ、しつけは最も大切な意味を持つてくるものであることが、考え直されなければならないと思うのである。

△三▽

そこでわたくし達は幼児教育の方法について考えてみよう。わたくし達は、幼児を教育する方法は、大きい子ども達を教育する方法とは根本的に異なっていることに注意しなければならぬ。

わたくしは、幼児教育の方法的な基本原理として間接性の

原理というものを考えている。幼児教育は、直接教育ではなくて、いわゆる間接教育なのである。間接というのは、直接に、真正面から、子どもに教育内容を与えるのではなくて、いわば間接的に、まわり道をしながら、誘導することによって、教育内容を自然に身につけさせるというやり方をいうのである。ちがうことばで表現すれば、一定の教育内容の方向へと近づいていくように仕向けてゆくのが、幼児教育の方法なのである。子どもが活動している間に、いつのまにか、こちらの願っているものが、すっかり子どもの身につけているようにすることが、その本質なのである。

たとえば、わたくし達は、子ども達が幼児期という時期には、全身運動の能力を、発達させなければならぬ時期にいることを知っている。そこで、わたくし達は、幼児達のこのような活動を誘い出すような環境を用意してやることによつて、このような全身運動を主体とした活動を引き出すことをつとめるのである。この考え方の線に沿って作られたものがある。わたくし達は、幼児達に、走りなさい、よじのぼりなさい、ぶらさがりなさい、……ということを言わない。しかし、このような環境を用意してやれば、子ども達はおのずか

ら、このような活動に没頭するようになるのである。環境を用意してやるという、一つの「しむけ方」によって、わたくし達は子ども達の成長に一つの方向づけをしてやることができる。これが幼児教育の方法の基本的な特質なのである。直接に、こうということを求めない、しかしこちらの用意した方向へ導入し、誘導し、しむけていけば、おのずからわたくし達の願うものが子どもの身につけてゆく、それが幼児教育の方法的な特質である。

〈四〉

このように考えてくると、わたくし達は、さきに考えたしつけということと、幼児教育の方法との間には、大きな類似点があることに気づくであろう。

身に行なつて習熟するようになるということと、誘導によつてこちらの願う方向へしむけていくということとは、同じことをちがう面から観察しているのだとも言えるであろう。しむけていって、一定の活動を行なうということ、それを重ねていくことによつて身に一定のものがつくようになるということ、同じことの連続を指しているともいえるであろう。

ことに、わたくし達は、幼児の教育というのは、幼児の生

活を指導することであると考えている。生活全体を望ましい方向へむけていくようにすることによって、望ましい能力や態度が身につくようにありたい、これが幼児教育者の願うところなのである。その生活を指導していくという技術、これはすでにさきに考えたように、これがしつけということなのである。

ただ、問題を見出そうとする人は、しつけの場合は、しつけを受ける者の側に自ら身につけようとする意志がないことを問題にし、ここに自発性を基本的な出発点とする現代の教育との食い違いを指摘しようとするかもしれない。しかし、低い年令の幼児においては、自ら受けようとする意識、自ら学ぼうとする意識がないことが多い。しかし、それがなければといって、教育が不可能なのではない。これを特定の活動の方向へ誘導するという技術があつてはじめて、子どもに特定のものを身につけさせることができるのである。極言するならば、自発性をひき出すようにする教育的技術がなければ、幼児教育は成立しないといつていいのである。

〈五〉

このように考えてくると、「しつけ」ということの考え方

は、幼児教育の方法と本質的に共通する面を持っている。わたくし達は、しつけということばが、きわめて古い、そして好ましくぬ響きを持っているということにだけとらわれないうで、その本質的な、そして生産的な意味づけをしなければならぬと思うものである。

とくに、幼児教育における生活指導ということの持つ重要な意味をふり返って考えるとき、しつけの意味が考え直されなければならない。

そして、それと同時に「しつけ」の内容、その方法というもの、幼児教育においてどう考えられなければならないかという問題が出てくる。この場合、しつけの内容を定めてくるものは、子ども達が将来その中に生活していくであろうところの文化の型である。そして、その方法を定めてくるものは、ひとしく幼児といつても、その年令によって異なるところの発達段階による心理的構造である。しかし、ここでは、これ以上論を進めることは紙数の都合上できない。この論では、「しつけ」と幼児教育との関連を考察するだけに止めておきたいと思う。

*

*

*